

飴だま

新美南吉

青空文庫

春のあたたかい日のこと、わたし舟ふねにふたりの小さな子どもをつれた女の旅たび人がのり
ました。

舟ふねが出ようとすると、

「おおい、ちよつとまってくれ。」

と、どての向こうから手をふりながら、さむらいがひとり走ってきて、舟にとびこみまし
た。

舟ふねは出ました。

さむらいは舟のまん中にどっかりすわっていました。ぽかぽかあたたかいので、そのう
ちにいねむりをはじめました。

黒いひげをはやして、つよそうなさむらいが、こつくりこつくりするので、子どもたち
はおかしくて、ふふふと笑わらいました。

お母さんは口に指をあてて、

「だまっておいで。」

といました。さむらいがおこつてはたいへんだからです。

子どもたちはだまりました。

しばらくするとひとりの子どもが、

「かあちゃん、飴だまあめちようだい。」

と手をさしだしました。

すると、もうひとりの子どもも、

「かあちゃん、あたしにも。」

といました。

お母さんはふところから、紙のふくろをとりだしました。ところが、飴だまあめはもう一つしかありませんでした。

「あたしにちようだい。」

「あたしにちようだい。」

ふたりの子どもは、りようほうからせがみました。飴だまあめは一つしかないのです、お母さんはこまっこまってしまいました。

「いい子たちだから待つておいで、向こうへついたら買ってあげるからね。」

といつてきかせても、子どもたちは、ちようだいよオ、ちようだいよオ、とだだをこねま

した。

いねむりをしていたはずのさむらいは、ぱっちり眼めをあけて、子どもたちがせがむのをみていました。

お母さんはおどろきました。いねむりをじやまされたので、このおさむらいはおこっているのにちがいない、と思いました。

「おとなしくしておいで。」

と、お母さんは子どもたちをなだめました。

けれど子どもたちはききませんでした。

するとさむらいが、すらりと刀かたなをぬいて、お母さんと子どもたちのまえにやってきました。

お母さんはまっさおになって、子どもたちをかばいました。いねむりのじやまをした子どもたちを、さむらいがきりころすと思ったのです。

「餓あめだまを出せ。」

とさむらいはいいました。

お母さんはおそるおそる餓あめだまをさしました。

さむらいはそれを舟ふねのへりにのせ、刀でぱちんと二つにわかりました。

そして、

「そおれ。」

とふたりの子どもにわけてやりました。

それから、またもとのところにかえつて、こつくりこつくりねむりはじめました。

青空文庫情報

底本：「ごんぎつね 新美南吉童話作品集」てのり文庫、大日本図書

1988（昭和63）年7月8日第1刷発行

底本の親本：「校定 新美南吉全集」大日本図書

入力：めいこ

校正：鈴木厚司、もりみつじゅんじ

2003年9月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

飴だま

新美南吉

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>